

帰属意識を高める働き掛け

# 自校教育や卒業生の言葉で誇りと自信を与える

## 麗澤大学

麗澤大学は近年、自校教育を充実させている。不本意入学か否かにかかわらず、意欲に欠ける学生が増えていることに危機感を募らせたためだ。卒業生が語り掛ける大学や創立者の魅力が、学生の誇りを高め、自ら一歩踏み出す姿勢を育てつつある。

### 目的意識と人間関係に課題を抱える新入生

近年の麗澤大学の入学者は、第1志望と第2志望以下の者がおよそ半数ずつ。ただ、志望順位と学習意欲は必ずしも相関しておらず、第1志望で入学しても意欲に欠ける学生もいれば、その逆の例も多い。

「フォローの必要があるのは、志望順位にかかわらず、『みんな進学しているから』という理由で何となく入学してきた学生や、人間関係をつくれず、大学で居場所を見つけれない学生だ」と語るのは今村稔学務部長。以前は外国語学部志望者の大半が留学を在学中の目標の一つとしていたが、今は希望者が減り、やりたいことを聞いても「わからない」と答える学生が増えているという。

全寮制による少人数教育を1986年度まで行っていた同大学には、顔を向き合わせての対話を重視する伝統がある。入学者の顔と名前を教員が事前に覚えたり、悩みを抱えていそうな学生に職員が積極的に声を掛けたりと、人間関係づくりに力を入れてきた。

しかし、学部・学科の増設などにより学生が増え、このような対応を行うのは難しくなっているのが現状だ。一人ひとりの顔を見ながらの確認ができないという理由から、学生証による出欠管理システムの導入を控えてきたが、欠席が続く学生をいち早く把握することを優先し、2010年度に導入を決めた。

### 自校教育の強化で学生の意識に変化

「何となく入学してきた学生」に、入学したことを心から納得してもらおうと、ここ数年、強化しているのが自校教育だ。

もともと自校教育に熱心だった同大学には、1年次の必修科目に、建学の理念を伝える「道徳科学」がある。創立者である廣池千九郎が提唱し、教育の基盤となっている道徳科学(モラロジー)について理解を深める科目である。しかし、道徳科学の歴史や理論を



新入生対象のキャンプで大学の歴史を説明する上級生。

中心とする中で建学の理念も合わせて伝えるという位置づけのため、学生には大学のことを深く知る授業と受け止めてこられなかったという。「必修科目としていることで、自校教育をしているつもりになっていた」と、今村学務部長は反省を口にする。

まず見直されたのが、一部の専攻を除く新入生が入学直後、群馬県利根郡みなかみ町で2泊3日の合宿を行う「谷川オリエンテーションキャンプ」での自校教育。同地には廣池千九郎の生前の住居があり、新入生はそれを見学しながら創立者の生き方、志を学ぶ。

従来は教員が行っていたその説明

を、2008年度から上級生が自分の言葉で語るスタイルに変更したところ、新入生への内容の浸透度が目に見えて変化。それまでキャンプの感想文に創立者の名前が出ることはほとんどなかったが、今では2割を超える学生が「廣池先生の考えがよくわかった」などと書くようになった。

また2009年度には、新入生向けの選択科目として「麗澤スピリットとキャリア」を開講した。全15回中6回、自校教育をテーマにし大学の歴史や理念、キャンパス内の建物の由来などを、卒業生でもある教員らが解説する。

「貴賓館は、創立者が世界規模の戦争が懸念される状況下、世界の首脳を招いて平和会議を開催しようと考えていた建物。それを知って『そんなにすごい人がつくった大学なんだ』と自校への誇りが生まれれば、その後の学生生活を前向きに考えるようになる」と、キャリアセンターの長谷川善仁氏は説明する。

### 卒業生をモデルにして学生生活を考えさせる

同じく新入生向けの選択科目「ジェンダーとキャリア形成」では、ゲストスピーカーとして卒業生をはじめとする社会人女性を招き、人生を語ってもらう。目的意識の希薄な学生に、自身の将来を真剣に考えさせ、学生生活への意欲を引き出すのがねらいだ。会社員、教員、主婦など、学生にとって、今の自分の延長線上にある姿としてリアルに想像できるさまざまな立場の人を選んでいる。

長谷川氏は、「それぞれに活躍の場を見つけて頑張っている卒業生から、この大学を卒業して良かったという言葉聞けば、自分もやれる、と意欲が

湧く」と語る。

卒業生が話すときは、学生が前のめりになるのがわかるほど、一般の講義との反応の違いは顕著だという。講義の中で多くの卒業生が伝えるのは「教職員を使い果たせ。投げ掛ければ必ず応えてくれる人たちだから」というメッセージ。学生は大学生活の基本的な姿勢を、卒業生というロールモデルから学んでいるのだ。

### 学生の孤立を防ぐSNSを構築

うまく人間関係をつくれぬ学生が、学内で孤立することを防ぐ役割を果たしているのは、2009年に開設された学内SNS「Green Community ひいらぎCafe」の学生生活サポート機能だ。学内の課外活動や、自分と同じ興味、趣味を持つ人を検索し、ネット上で接触を図ることができる。

仲間を求め書き込みがあると、職員と学生で構成する運営委員会が趣味や関心を聞き出し、それに合った活動やコミュニティを紹介する。最初はこのバーチャルな世界で親睦を深めてもらい、最終的には現実世界でのコミュニティづくりにつなげる。

SNSでは悩み相談にも乗っている。学生生活の不安を訴える声に対して、教職員が助言したり適切な相談機関を紹介したりするほか、学生によるピア・サポートも行われている。

長谷川氏は、「バーチャルなコミュニティに慣れている学生にとっては、いきなり直接的な対話をするのはハードルが高い。このSNSがなければ一人ぼっちになっていたかもしれない学生が、今までにはないつながり方



学内SNSを起点にしてリアルな交流を促進する。

でリアルなコミュニティーを形成している」と、手応えを語る。

### 大学への誇りから生まれた自発的な姿勢

自校教育の見直しや卒業生による語り掛けによって学生生活に意義を感じさせ、学内SNSの活用でコミュニティへの参加のきっかけを与える。これらの取り組みは、学生の帰属意識と自発性を高める結果につながったと大学では見ている。

顕著なのは、課外活動の活発化だ。2010年度には、学生のモチベーションや能力の向上を目標として活動するサークル「Reitaku Task Force」が学生の発案によって設立された。自学の魅力や他の学生に伝えようと、学内取材してフリーペーパーを発行している。

こうした活動に携わっているのは、入学時から目的意識や愛校心が強かった学生ばかりではない。入学後に芽生えた帰属意識と自発性が、大学全体のムードを盛り上げているという。大学生活に充実感を覚える学生や母校への誇りを胸に社会へと巣立つ卒業生を増やし、こうしたポジティブな気持ちを後輩に還元するという「循環」をさらに推し進めていくことを、麗澤大学はめざしている。